

1 主題名 友達を思っ B (10) 友情, 信頼 教材「ともだちやもんな, ぼくら」

2 指導にあたって

本主題は、学習指導要領で示されている1学年及び2学年の内容項目B- (9) 「友達と仲よくし、助け合うこと。」をねらいとしている。児童にとって友達は、家族以外で特に深い関わりをもつ存在であり、遊びや学習、生活の中で一緒に活動することを通して、互いに影響し合い、高め合う存在である。よりよい友達関係を築くためには、様々な学習活動や生活場面を通して互いを認め合い、助け合い、信頼感や友情を育てることが大切である。身近にいる友達と仲よく活動することのよさや楽しさに気付き、友達と助け合っていこうとする判断力を高めたいと考え本主題を設定した。

児 童 の 実 態 調 査		(28名 5月23日)
1	困っている友達を助けたことがありますか	・はい (22名) ・いいえ (6名)
2	自分が困っているときに友達に助けてもらったことがありますか	・はい (25名) ・いいえ (3名)
3	どんなときに助けてあげましたか	・転んだとき (10名) ・忘れ物をしたとき (5名) ・勉強が分からないとき (5名) ・困っていたとき (2名)
4	どんなときに助けてもらいましたか	・勉強が分からないとき (12名) ・けがをしたとき (4名) ・忘れ物をしたとき (4名) ・遊ぶ人が見つからなかったとき (1名) ・悩んでいるとき (1名)
5	助けてもらったときどんな気持ちになりましたか	・うれしい気持ち (19名) ・感謝の気持ち (5名) ・自分もこんな人になりたいと思う気持ち (1名)
6	友達がいてよかったと思うのはどんなときですか	・一緒に遊んでいるとき (14名) ・勉強を教えてもらったとき (8名) ・助けてもらったとき (6名)

本学級の児童は明るく活発な児童が多い。進級してから2ヶ月が過ぎ、学習や係活動に意欲的に取り組んでおり、帰りの会では多くの児童が友達のよいところを発表している。また、友達と誘い合って遊んだり、分からないところを教え合ったりする友好的な関係が築けている反面、幼児期の自己中心性が残り、些細なことで言い争いになる場面も見られる。実態調査からは、多くの児童が助けたり助けられたりする体験を積んでおり、友達のよさを実感できていることが分かった。

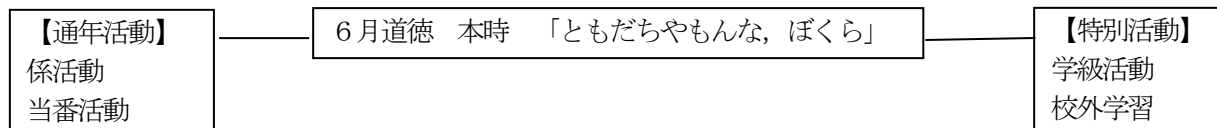
本資料では、「ぼく」とヒデトシとマナブの三人が、近所のかみなりじいさんの家の木で遊んでいるところを見つかつて逃げ出したが、ヒデトシが転んでしまい、そのまま置き去りにしてしまう。ヒデトシを助けに行こうかどうか大いに迷いながらも、二人はヒデトシを助けに行く決心をし、謝りに行った。するとかみなりじいさんは怒らずむしろ褒めてくれ、三人の友情の絆が深まったという内容である。

指導にあたっては、「ぼく」とマナブが、ヒデトシを助けに行こうと決めるまでの心の葛藤を十分に考えさせるために、発問の提示方法や板書の構成を、視覚的にも捉えやすくできるよう具体的に工夫する。導入では、事前のアンケートを活用し、「友達がいてよかった経験」についての結果を知らせ、本時のねらいとする価値への方向付けをする。展開前段では、かみなりじいさんに見つかり、転んでしまったヒデトシをおいて逃げる時の気持ちや、助けに行くかどうか葛藤する「ぼく」について、自分ならどうするか考えさせる場をつくり、「ぼく」の悩みに共感させる。また、悩みながらも助けに行こうと決心した「ぼく」の行動を、「ともだちやもんな, ぼくら」の言葉と結び付け、友達に対する考えを深めてさせていく。展開後段では、これまでの生活経験を想起させ、導入で提示したアンケート結果を再提示しながら、「友達として大切なことは何か。」をじっくり振り返らせる。終末では、友達に関わる歌を流すことで、1日の生活時間の大半を一緒に過ごしている身近な友達と、仲よく活動することのよさや、助け合うことの大切さが実感できるように、余韻をもって学習を終えるようにする。

3 指導内容の系統性・発展性・各教科との関連

道徳科 B (10) 友情, 信頼

【第1・2学年】 友達と仲よくし、助け合うこと。	【第3・4学年】 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。	【第5・6学年】 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。
-----------------------------	-----------------------------------	--



4 本時の指導

(1) ねらい

友達を思うことの大切さに気付き、友達と仲よくし、助け合っていこうとする判断力を育てる。

(2) 準備・資料

・アンケート結果表(小黒板), ワークシート, 掲示用場面絵, 吹き出し型小黒板

(3) 展開 ☆思考力・判断力・表現力を高める支援 ○指導に生かす評価 (評) 記録に残す評価

主な活動と発問	予想される児童の反応	指導上の留意点・評価
1 友達がいてよかったと思う経験について話し合う。 ○ 友達がいてよかったと思うのはどんな時ですか。 2 資料「ともだちやもんな、ぼくら」の範読を聞いて話し合う。 ○ ヒデトシが転んでも走り続けた「ぼく」はどんなことを考えていたでしょう。 ○ (どうしよう…。) と悩んでいた「ぼく」はどんなことを考えたでしょう。 ◎ 「ぼく」はどんなことを考えて、マナブに「いこうか。ヒデトシをたすけに。」と言ったのでしょうか。 3 自分を振り返り、友達に対する考えを深める。 ○ 今までより、もっと友達と仲よく助け合っていくためには、どんなことが大切だと思いますか。 (1) 自分で考える。 (ワークシート) (2) 全体で交流する。 4 本時の学習を振り返る。 (1) 「友達はいいいもんだ」の曲と映像を視聴する。	・優しくしてもらったとき ・一緒に遊んでいるとき ・困ったときに助けてくれるとき ・勉強を教えてくれるとき ・早く逃げよう。 ・ごめん、先に行くよ。 ・かみなりじいさんに捕まったら大変だ。 ・ヒデトシ、大丈夫かな。 ・転んだヒデトシが悪い。 ・叱られるのがとても怖い。 ・このまま放っておこう。 ・ヒデトシ、泣いているかな。 ・助けに行かなくちゃ。 ・このままじゃかわいそう。 ・ヒデトシは大切な友達だから、助けに行こう。 ・ヒデトシを一人残してきて悪かった。 ・僕もヒデトシと一緒に叱られよう。 ・ヒデトシは待っているに違いない。 ・3人はいつも一緒にの友達だ。助けるのが当然だ。 ・友達が喜んでくれることをする。 ・困っている友達がいたら、進んで助ける。 ・友達のためになることをする。	・具体的な状況だけでなく、そのときの気持ちについても答えを促すようにする。 ・事前にとったアンケート結果を提示するが、ねらいとする価値への方向付けをし、展開後段で深めるために、簡単に押さえる程度にする。 ・資料の内容が確認できるように、登場人物の名前の書いたカードを掲示し、出来事を補足説明しながら範読を行う。 ・発問内容を明確にするために、キーワード化した発問をその都度掲示していくようにする。 ・児童の発言一つ一つを受け止めて、まとめて板書するようにする。 ・「ぼく」の強い葛藤を多面的・多角的に考えられるようにするために、板書で対比的整理し、視覚的に捉えられるようにする。 ・「ぼく」の悩みに共感させるために、自分ならどうするかと質問を投げかけ、紅白帽子の色で意思表示をさせる。 ☆中心発問では、「ぼく」の行動の根拠を考えられるようにするために、助けに行くかどうか悩んでいたことに触れてから発問するようにする。 ☆「ぼく」とマナブが葛藤した末に、その葛藤を乗り越えて助けに行くことを決めた、根拠となる考えを問うようにする。 ○怖さを越えてまで戻ったことを強調し、「ぼく」の行動を「ともだちやもんなぼくら」の言葉と結びつけて考えられるようにする。 ・友達を助けたい思いを際立たせるために、教材名を再度提示して、展開後段につなげるようにする。 ・友達に対する考えを深める補助とするために、導入でのアンケート結果を再度示す。 ・机間指導の際、ねらいとする価値について理解している児童を数名選び、意図的指名をして発表させる。 (評) 友達のよさに気付き、これからも助け合っていこうと考えることができたか。 (ワークシート・観察・発表) 【ねらいを達成した児童の姿】 友達を思うことのよさに気付き、仲よく助け合っていこうと考えることができる。 ・友達のことが思い浮かぶように「友達はいいいもんだ」を聴き、終末の雰囲気を作る。